

様式 7 (事前・公表)

平成 28 年度 試験研究課題検討結果票 (事前)

課題 No.	課題名	研究期間	研究概要 (目的・計画・予想される成果)	主な所見・指摘事項等		検討結果
				(ア)研究の必要性や重要性 (イ)研究計画の妥当性 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他	指摘事項等に対する対応	
1	施設トマト栽培における新しい炭酸ガス施用技術を核とした革新的増収及び安定生産技術の開発	平成 29 年度	<p>県内で栽培が最も多い施設野菜であるトマトを対象に、従来の収量から30%以上の増収を可能にするために、比較的低濃度の炭酸ガスを長時間施用するなどの新しい炭酸ガス施用技術を確認する。光合成及び転流に対する環境条件の影響などを明らかにし、千葉県施設園芸地域の気象条件に適する革新的な炭酸ガス施用技術を確認する。炭酸ガス施用の経済効果試算ツールの開発等を合わせて行い、現地における技術導入が円滑に行えるようにする。</p> <p>また、長期の安定生産を可能にする強勢台木の利用技術を確認する。炭酸ガス施用による長期の多収を継続するためには、収穫後半まで草勢が落ちないことが必要である。種間雑種台木などの強勢台木は土耕栽培では草勢が旺盛になりすぎるため果実の色回りや品質、食味の低下を招きやすいとされている。そこで、養液栽培において強勢台木へ接木した場合の影響を明らかにするとともに、適する台木を選定し、品質の低下を抑え収量増加を図る。</p> <p>さらに、湿度管理がトマトの生育に及ぼす影響を明らかにするとともに、長期栽培に伴い発生する好湿性病害の発生を軽減する効果的な湿度管理方法を確認する。</p>	(イ)炭酸ガス施用における増収効果最大化の試験区で、濃度 800ppm を終日維持するのは難しいと思われる。強勢台木の試験は取り組む価値があるが、まずは長期多段どり栽培での樹勢低下の要因解明と対策を立てた上で強勢台木の利用を考えるべき。 トマト長期どりの中で現場で一番のネックは農薬の使用回数制限。対策を検討して欲しい。	いただいた様々な意見を参考にしながら、場合によっては試験区の再設定も含めて検討して参ります。 農薬の問題に関しては、小課題「好湿性病害発生要因の解明及び病害軽減技術の確立」で、対応して参ります。最終的には長期多段取りに合った防除体系ができればと考えています。	4

検討結果は事務局が基準に従い以下の番号を入れる。

- 5: 独創性・貢献度等が高く、是非課題化した方が良い
- 4: 課題化した方が良い
- 3: 部分的に検討する必要がある
- 2: 大幅に見直しする必要がある
- 1: 課題化する必要はない

様式8 (中間・公表)

平成28年度 試験研究課題検討結果票 (中間)

課題No.	課題名	研究期間	研究概要 (目的・計画・予想される成果)	主な所見・指摘事項等		検討結果
				(ア)研究の必要性や重要性 (イ)研究計画の妥当性及び達成の可能性 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他	指摘事項等に対する対応	
2	露地野菜経営における落花生との輪作体系の確立	平成26～30年度	<p>サツマイモ、ニンジン、スイカ、ネギ、ダイコンなどの露地野菜では、専作が進んでおり連作障害により品質・収量が低下、土壌消毒剤への依存などの課題を抱えており、連作障害を回避する輪作体系の確立が求められている。一方で全国生産の約8割を占め、ブランド力を持つ本県の落花生は、機械化が進まない中で、生産者の高齢化とともに生産量が減少している。そこで、落花生を露地野菜の輪作体系を支える品目の1つとして組み入れながら、大規模露地野菜栽培の連作化を回避して持続的発展と生産振興を図る体系を作る必要がある。</p> <p>専作・連作化が進む露地野菜地帯に落花生を含めた輪作体系を確立するために、地域輪作の可能性の調査と、露地野菜への輪作効果の科学的な検証を耕種的防除や緑肥導入条件の解明で明らかにしていく。また、落花生栽培の機械化による省力化と、高品質多収品種を利用した栽培技術を開発して、生産から利用、販売戦略で消費を拡大し、落花生の維持振興を図るとともに、露地野菜産地の栽培環境の優位性を維持させる。</p>	(イ)ニンジンでは、しみ症が問題となる一方で、ゾウムシなどの被害も増えている。ゾウムシは落花生にも発生する。エンバクでは、コガネムシの幼虫などが増えるのでD-Dなどの土壌消毒処理をしないとニンジンの被害を防げない。害虫の対策については、落花生や緑肥だけでは難しいと思う。	輪作だけで全てがうまくいくわけではありません。個々の輪作作物の利点、欠点をよく把握し、現場への導入条件を整理することが大切と考えております。土壌消毒については、必要最小限の使用も含めて取り組んで参ります。	4

検討評価は以下の番号を記入。

- 5: 独創性・貢献度等が高く、是非継続した方が良い
- 4: 継続した方が良い
- 3: 部分的に検討する必要がある
- 2: 大幅に見直しする必要がある
- 1: 中止すべきである

様式9 (事後・公表)

平成28年度 試験研究課題検討結果票 (事後)

課題No.	課題名	研究期間	研究概要 (目的・計画・成果)	主な所見・指摘事項等		検討結果
				(ア)研究計画の妥当性 (イ)研究成果の達成度 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他	指摘事項等に対する対応	
3	園芸産地活性化のための土地利用型野菜安定生産技術の確立	平成25～27年度	<p>本プロジェクトの成果</p> <p>(1)作業適期の分散による業務用キャベツの安定生産技術を確立するために、夏播き栽培の定植期及び秋播き栽培の収穫期の拡大を図った。夏播き栽培では、9月下旬定植で晩生品種の3～4月収穫及び中間型品種の1～2月収穫りが、秋播き栽培では、10月中下旬播種のべたがけ栽培で5月上中旬収穫が実証された。</p> <p>(2)加工・業務用キャベツ栽培で規模拡大の制約となる春どりについて、べたがけ栽培導入による規模拡大効果を試算した。その結果、既存の作型の面積を減らさずに、収穫時期が前進化する1週間で収穫可能な分だけ栽培面積を拡大できた。</p> <p>(3)秋冬どりブロッコリーの安定生産のために、「SK7-096」、「アーサー」、「クリア」等7品種を選定した。選定した品種を用いて、8月10日～25日の間に播種を複数回行うことで秋冬の連続収穫が可能になる。また、定植適期を過ぎた苗に対し、溶出特性リニア型の緩効性肥料を定植時に箱施用することで、定植後の生育が改善した。</p> <p>(4)11月～3月までナバナを安定出荷するための品種の組み合わせと栽培方法を明らかにした。9月上旬から「春華」、「京の春」、「栄華」、「華の舞」、「花まつり」を株間30cmで追肥量を変えて栽培すると、需要期である2月下旬～3月中旬に出荷ピークとなる栽培体系が確立できた。また、気象変動に対応可能な品種特性が示唆された。</p> <p>(5)春どりダイコンにおいて、極晩抽性の品種を用い、簡易なべたがけによる栽培法を確立した。「蒼の砦」は2月中旬播種からべたがけ栽培が可能であり、「トップランナー」は2月中旬播種では二重の被覆が必要であった。トンネル被覆と比較して経費は一重被覆では1/2、作業時間は1/4程度であり、面積の拡大が可能となる。</p> <p>(6)春夏ニンジンのトンネル被覆を省略するべたがけ栽培の試験を行った。スーパーパスライトの上にパスライトブルーを重ねた二重被覆では、好適な播種時期が1月下旬以降で、6月中旬以降の収穫となった。トンネル栽培と比べて収穫適期は遅れるものの、資材費が約30%、作業時間が約70%削減できると考えられた。</p>	(ウ)産地の活性化のための方策が非常に多様なため、具体的なプログラムを関係部局で作る場合に技術側から情報をサポートする必要がある。データの見せ方などケースごとにフォローをしっかりとお願いしたい。	品種に関して水田と畑で試験結果が違うところもあるので、より適切な品種選定は現場で確認する必要があります。特に水田に関しては新しい課題の中でも取り組んで参ります。	4

検討評価は以下の番号を記入。
 5:計画以上の成果が得られた
 4:計画どおりの成果が得られた
 3:計画に近い成果が得られた
 2:わずかな成果しか得られなかった
 1:成果が得られなかった